

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名：北海道の輪換畑を利用したイチゴリレー苗の生産技術 10．体系化			
[要約] リレー苗用親株は小型ポットで生産し、5月上・中旬に輸送する。現地の輪換畑にマルチ+トンネル被覆して定植した(春定植)後は約1か月間被覆する。増殖した苗は9月上・中旬に掘り採り、直ちに別の輪換畑に定植する(秋定植)。越冬、雪解け後は春植と同様に被覆して、9月中旬に掘り採って千葉県へ送る。到着した苗は7日を限度に促成栽培用の苗として速やかに定植する。リレー苗の生育・収量特性は、1, 2月に大玉果が多く、成り休みが少ない点である。			
キーワード [*] (専門区分)	栽培	(研究対象) 野菜類 - イチゴ	
(フリーキーワード)	イチゴ、苗生産、体系化、輪換畑、北海道		
実施機関名	(主査) 農業総合研究センター暖地園芸研究所野菜・メロン研究室 (協力機関) イチゴリレー苗プロジェクトチーム 安房農業改良普及センター、安房イチゴ苗委託組合 北海道空知南東部地区農業改良普及センター (実施期間) 2001年度～2003年度		

[目的及び背景]

イチゴの炭疽病及び萎凋病を回避して、健全苗を安定的に確保するため、北海道の輪換畑を利用したイチゴリレー苗の生産技術を明らかにし、その成果を組み合わせる。

[成果内容]

北海道の輪換畑を利用したイチゴリレー苗の生産体系は図1のとおりである。具体的な技術内容は下記のとおりである。

1．北海道で用いる親株の生産・輸送

12月20日頃から20日間の低温処理(3℃)を行い、昼温15℃、夜温10℃で温度管理し、小型ポットで採苗する。4月上旬にはすべての株について炭疽病の検定を実施し、5月上・中旬に北海道へ輸送する。

2．北海道での苗の増殖

到着後の親株は直ちに定植し(春定植)、保温、風除けを兼ねて、遅霜の心配がなくなるまでマルチ+有孔ポリフィルムで被覆する。増殖した苗は9月上・中旬に掘り採り、別の輪換畑に定植(秋定植)し、雪解け後は春定植と同様に被覆する。

3．北海道からの輸送、千葉県での定植

千葉県へ輸送する苗は9月上・中旬に掘り採り、輸送時の温度は約5～15の範囲とする。到着後の苗は8の予冷库に貯蔵し、7日を限度にできるだけ早く定植する。

4. リレー苗の促成栽培における生育・収量特性

リレー苗は千葉県で育苗した慣行のポット苗と比べて、総収量は同等に得られるが、初期収量では劣る。しかし、1～2月には大玉果が多く、成り休みが少ない。また、リレー苗とポット苗の組合せは収穫期間を通して安定収量が確保できる。

[留意事項]

1. 苗の増殖圃場（輪換畑）は畑初年目に限る。
2. 輪換畑（畑初年目）は土壌消毒を行う必要がない。
3. 各技術の詳細は栽培関係が野菜部門、病害虫関係が病害虫部門、の試験研究成果普及情報を参照とする。

[普及対象地域] 県下全域

[行政上の措置]

[普及状況] 北海道側の苗生産者は当初2名から10名に増加した。

千葉県側の苗利用数は当初5万本から、平成15年度には35万本に増加した。

[成果の概要]

図1 北海道の輪換畑を利用したイチゴリレー苗の生産体系



注:1 低温処理終了後は、昼温25、夜温10の温室内で管理する。

注:2 採苗終了後は、ランナー活着後に用いた親株を廃棄する。

注:3 炭疽病の検定は5月上・中旬に北海道へ輸送するすべての株について行う。

[発表及び関連文献]